

52【街の散策からの気づき発見】

桜の季節2026

会員 K.T.

今年も桜の季節になった。大落古利根川の桜並木・隅田川の桜並木・八幡公園の桜並木を自転車で散策し、春が巡ってきたことを実感する。知らず知らず、「さくらさくら」の歌が口にでる。

「さくらさくら（歌詞作曲 不祥）

さくら、さくら。野山も、里も、見わたすかぎり

かすみか、雲か、朝日に、におう

さくら、さくら。花ざかり

さくら、さくら。弥生の空は、見渡すかぎり

霞か、雲か。においぞ、いづる

いざや、いざや。見にゆかん」

もともとは江戸時代の箏曲(そうきょく/琴の演奏曲)だという。レファレンス協同データベースによれば、「明治21年(1888)に東京音楽学校の箏曲集に「櫻(さくら)」として納められ、昭和16年(1941)の国民学校音楽教科書の「うたのほん」では、新たな歌詞が「～野山も」に書き換えられた。日本古謡として紹介されるときは、「～弥生の」の歌詞である。(後略)」

桜の季節到来は、私達にワクワク感をもたらす。最近AIが人間の感情分析まで行っているようだ。ネットAI分析いわく、「櫻が私達をワクワクさせる理由は、単なる美しさだけでなく、科学的なリラックス効果、心理的な季節感そして、文化的・歴史的な背景が複合的に重なっているからです。」、という。科学的には桜の葉や花びらに「クマリン」という成分や「フィトンチッド」という香り成分があり、これらが沈静作用・リラックス効果があること。心理的には、季節感、葉が出る前に一斉に花を咲かせるソメイヨシノの特性が、景色を一気にピンク色に染める華やかさが、人の心を高揚させること。文化・歴史的には、「散ることの美学」、武士道精神や諸行無常の精神性と結びついて、「やがて散る、今しか見られない。」、という制限から感動があること、と分析している。

AIの進化には驚く、なかなか説得力のある分析だが、ただ私は、美しい、ワクワクする、というのは、人の五感で感じることで、いいと、思っている。東京に桜の開花宣言が出て、2、3日後、春日部市の桜たちも、一部開花を迎えた。今日は2分咲き程度、多くの蕾は膨らみ、先端はピンクになっている。もうすぐ桜並木はピンクの桜色に染まるだろう。桜の写真をとっていると、「咲いてきましたね」、と散歩の人から声をかけられた。「え、さくらが咲くと、なにかワクワクしますね。」、「はい、春が来ましたね。これで花粉がなければいいのですけどね。」、いう。「ご同感です。」、見知らぬ人と短い会話を交わした。これも桜の軽い高揚感のなせるところかも知れない。開花が始まって5日目、満開の花を愛でる。桜は、すぐに盛りを過ぎ、散ってしまう。先人たちは、桜が散り急ぐことに、もののあわれを感じたり、哲学を見た人もいる。幸い、先人達の歌が残っている。

ひさかたの ひかりのどけき 春の日に しづ心なく 花の散るらむ (紀友則 古今和歌集)

(日の光がこんなにもどかな春の日に、どうして落ちていた心もなく、桜の花は散っていくのだろうか)

明日ありと、思う心の あだ桜 夜半に嵐の 吹かぬものかは (親鸞聖人)

(明日も桜はあると思っても、夜嵐が吹いて散ってしまうかもしれない。)、親鸞の歌は、人の世は予測不可能なので、今日が最後かもしれない、という心構えで一日一日を大切に生きるべきだ、との教えだ、という。

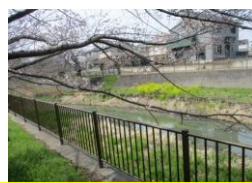
万物は絶えず変化する、2026年の桜を思い、一句、しみじみと一期一会の花見かな (KT 拙作)



大落古利根川の桜



満開の桜



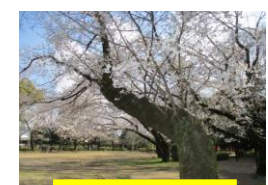
隅田川の桜と菜の花



満開の桜



八幡公園の桜



満開の桜